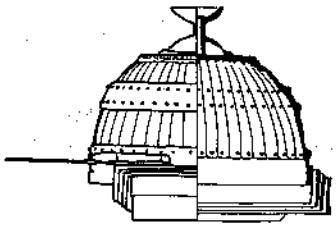
紀　　要

第　4　号



1990. 12

財団法人滋賀県文化財保護協会

8．虎御前山南麓平野の遺跡

北村圭弘・中村健二

1．はじめに

琵琶湖の北東部に位置する湖北の平野は、岐阜県境から西流する姉川と福井県境から南流する高時川によって形成された扇状地性の沖積平野である。虎御前山はこのふたつの河川の合流点の北東部に位置し、隣接して浅井氏3代の居城として知られた小谷城が所在する。

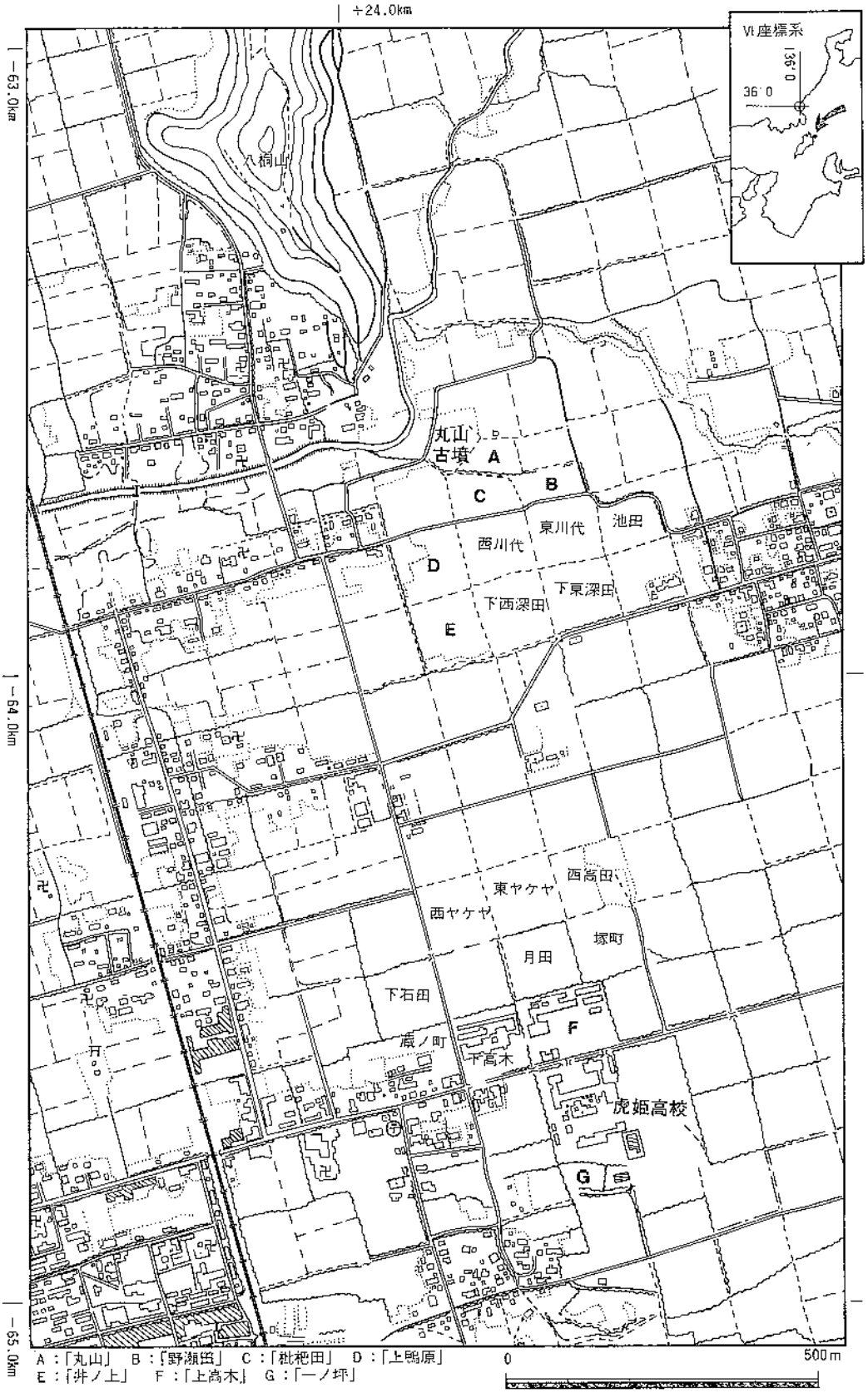
本稿で紹介しょうとする遺物は、その虎御前山の南麓にひろがる滋賀県東浅井郡虎姫町大寺・三川・五村・大井地先の姉川北岸の平野において、1968年から1970年にかけて、地元在住の百々正志氏により採集されていたものである。遺物はいずれも土木工事等に際して不時発見されたものであるが、出土地点を地図に記録しつつ採集しているため、遺物の出土地が丸山古墳の南側一帯と県立虎姫高校周辺部の2箇所に集中していることがわかる（第1図）。次章以下においては、出土遺物を採集された小字ごとに報告し、若干の考察をおこなうこととしたい。

2．既往の調査

虎御前山の南麓にひろがる姉川北岸の平野には、弥生時代から室町時代にかけての多数の遺跡の存在が知られている[1]。ここでは発掘調査等により比較的内容の明らかな丸山古墳、五村遺跡を中心に周辺遺跡の状況を概観しておきたい。

丸山古墳は虎御前山南尾根（八相山）の南端部に位置する。1978年に墓地公園の造成工事に際して発見され、「唐草文縁細線式獣帯鏡」と呼ばれる後漢鏡の出土したことで注目をあつめた。主体部は必ずしも明確ではないが朱塗りの木棺を内納した粘土槨であったらしい[2]。五村遺跡は丸山古墳の南約1.2kmに所在し、ふるくより土器等の出土することが知られていた。1979年以降、小字「月田」「塚町」「東ヤケヤ」「西高田」（以上ほ場整備事業関連）、「下高木」（虎姫小学校改修事業関連）、「下石田」（給食センター建設事業関連）において発掘調査が実施され、弥生時代中期から古墳時代前期、および平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての土器等の出土することが明かとなっている。遺構としては虎姫小学校地およびその隣接地を中心とした範囲で4棟の竪穴住居と3基の方形周溝墓等が検出されており、主として弥生時代の後期を中心とする集落遺跡であることが判明している[3]。明確な遺構の検出されなかった平安時代の遺物の所属については、郷倉院跡が地名化したといわれる小字「蔵ノ町」[4]（小学校西側）に関連するのかもしれない（第1図）。

なお丸山古墳と虎御前山の間を流れる田川の流域には五村遺跡と一時的にせよ時期の重複する複数の遺跡の存在が知られている。留目松橋遺跡、伊部遺跡、中野遺跡がそれであり、中野遺跡が不時出土の土器類から弥生時代中期と推定されるほかは、いずれも発掘調査によって弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡であることが判明している[5]。今回報告する丸山古墳南側の小



A：「丸山」　B：「野瀬田」　C：「枇杷田」　D：「上鴨原」
E：「井ノ上」　F：「上高木」　G：「一ノ坪」

第1図　遺物の出土地と小字名の分布（1：10,000）

字「上鴨原」などでも同時期の土器等が出土しており、姉川北岸の田川の流域ではおおよそ1km余りの距離を単位として弥生時代中期以降の集落が営まれている可能性が高い。

3．各小字の出土遺物

遺物の採集地は小字「丸山」「野瀬田」「枇杷田」「井ノ上」「上鴨原」「上高木」「一ノ坪」の7地区で、列記した順に北から南へ、また丸山古墳からは離れる位置関係にあり、前5地区は丸山古墳に、後2地区は県立虎姫高校に隣接し、後者はこれまで知られてきた五村遺跡の範囲内の中心部にある。出土する遺物はおおむね弥生時代後期から古墳時代前期を中心とするが、前3地区については平安時代から鎌倉時代前期のものが主体を占める。古墳時代中期から同後期の遺物は基本的に見られない。当地付近の標高はおおむね93m～95mをはかるが、前5地区と三川集落との間の水田地には「西川代」「東川代」「下西深田」「下東深田」「池田」等の小字名が集中しており、かつてこの付近が低湿地であったことを憶測させる。

以下、各小字ごとに出土遺物を報告していく（第1図）。

A「丸山」――東浅井郡虎姫町三川――

須恵器、灰釉陶器等が採集されている（第2図）。

須恵器坏類（1～4）：(1)は坏蓋、(2)は有台の坏身、（3～4）は無台の坏身である。焼成および色調は(2)が軟質で灰色のほかは、堅緻に焼成され、灰色から青灰色を呈す。

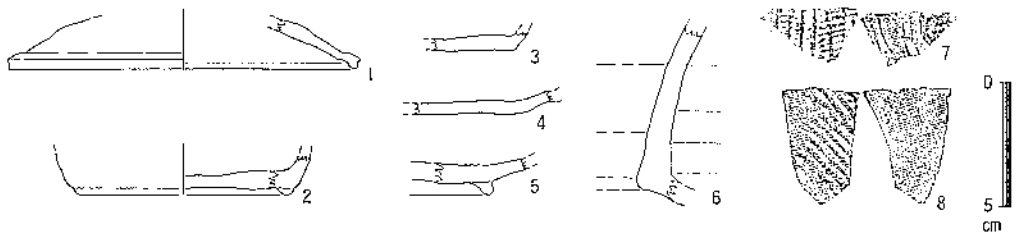
須恵器甕類（6～8）：(6)は頸部、その他は甕類の体部と推定される。外面の叩き締めは（7～8）が木目に直行する平行線文、内面の当具痕はいずれも同心円文と推定されるが、(7)以外は(6)も含めて細同心円文である。焼成は堅緻で灰褐色を呈す。

灰釉陶器埦皿類(5)：小振りな台形状の高台を有す。焼成は堅緻で灰褐色を呈す。

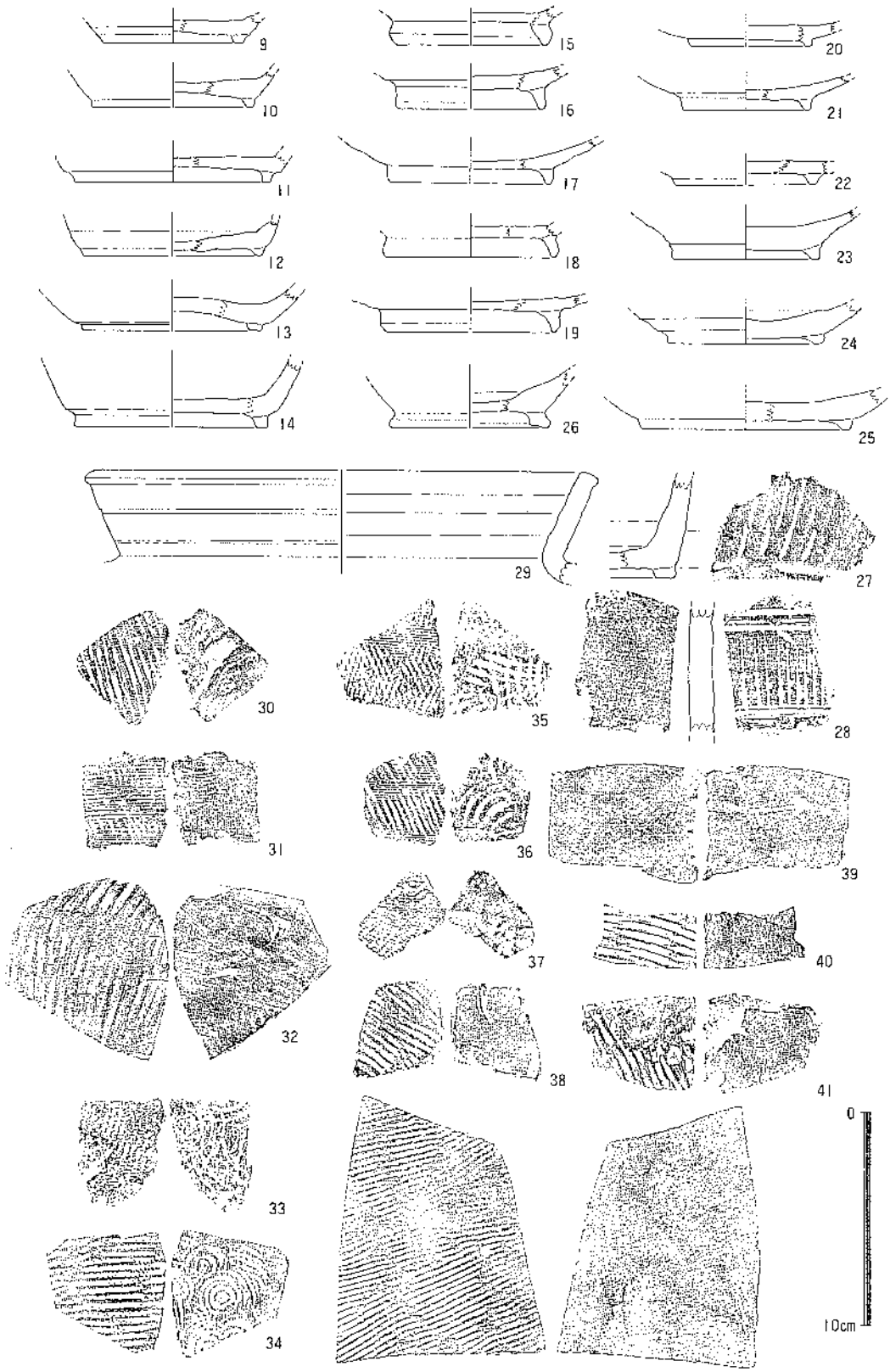
B「野瀬田」――東浅井郡虎姫町三川――

須恵器、灰釉陶器、山茶埦、土錘等のほか有孔円盤も採集されている（第3、4図）。

須恵器坏類（9～14）：坏蓋および有台、無台の坏身が知られるが、図示し得たのは有台の坏身のみである。高台径は6.5cm～9.0cmを測り、法量には大小の2種類があるらしい。高台の断面形状は横に長いつぶれた長方形～台形状を呈す。(11、13～14)については畳付きの中央部が浅くくぼみ、底部の残りのよい(11)の内面見込み部分には使用痕と推定される磨耗がみられる。焼成はいずれも堅緻で、灰色～青灰色の色調を呈す。

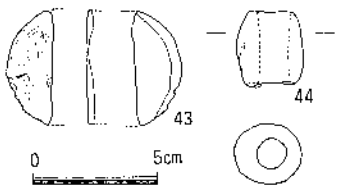


第2図　小字「丸山」出土遺物（S＝1/3）



第３図　小字「野瀬田」出土遺物(1)(Ｓ＝1/3)

須恵器甕類(29～42)：(29)が口縁部片のほかは、すべてが体部片である。外面の叩き締めは（30、35、38～41）が木目に直行する平行線文、(32～34、36)が木目に斜行する平行線文、(31、37、42)は平行線文であることは確実だが、木目との関係は明確でない。(30～31、35～36)については叩き締めの後、カキ目を施す。内面の当具痕については（31、41）が細同心円文、(30、33～36、39)が同心円文と推定され、少なくとも(33)は中心凹タイプ、(34)は中心凸タイプの原体[6]を使用を使用していることが分かる。焼成は堅緻で、灰色～灰黒色を呈す。(40、42)などについては中世須恵器の可能性がある。



第４図　小字「野瀬田」出土遺物(2)（Ｓ＝1/3）

灰釉陶器埦皿類(15～22)：いずれも貼り付けによる高台を有し、高台径はおおよそ5.5cm～7.8cmを測る。高台の形状には大振りなもの（15～19）と小振りなもの（20～22)の２種類が認められるが、前者は(16)以外のすべての端部を内彎させ、断面形状がいわゆる「三日月高台」を呈している。焼成は堅緻で、灰色を呈す。

灰釉陶器壺類（26～28）：（26～27)は底部片で、高台の断面形状はいずれも横につぶれた長方形状を呈す。(26)の腰部外面には回転ヘラケズリが、(27)にはケズリとともにおおよそ0.5cm～1.0cmの間隔で縦位の細長い凹部が観察される。この凹部の施文の単位はケズリの単位と一致するようである。(28)は頸部片と推定されるが、外面には上下を少なくとも２重の凹線で挟まれた縦に細長い文飾が観察される。施文は櫛状工具の木口を縦位に突き刺しておこなっているようである。焼成は堅緻で、明るい灰色～暗い灰色を呈す。

山茶埦(23～25)：いずれも不整形な台形状の高台を有し、畳付きにはわずかながら糸切痕が観察される。底部の外面には糸切り痕を残し、内面の見込み部分は使用痕と推定される顕著な磨耗が認められる。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈す。（北村）

土錘(44)：幅の広いやや大きめな管状土錘である。長さ３cm、径2.5cm、孔径1.2cmを測り、重量は20ｇである。

有孔円盤(43)：滑石製の有孔円盤あるいは紡錘車の破片であり、底面を丁寧に磨いている。

（中村）

Ｃ「枇杷田」――東浅井郡虎姫町三川――

弥生土器、古式土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、天目茶碗、砥石等が採集されている（第５、６図)。

古式土師器壺類(45)：壺の口縁部で、頸部から内彎気味に立ち上がり、口縁部が直立する。口縁端部は面をもち、内外面ともに丁寧なナデ調整をおこなう。口縁部内面はヨコナデに先立つハケ目調整が認められる。

古式土師器高坏類(46、48、51～55)：(46)は大型の高坏である。緩やかに外反しながら開く口縁部をもち、坏底部との粘土の接合部で剥離している。(51～54)は高坏の脚柱である。(51、52)は外面はヘラミガキをおこなう。(54)は脚柱部より緩やかに開き裾部で強く屈曲する。

古式土師器甕類(47)：甕の口縁部で端部は面をもつ。

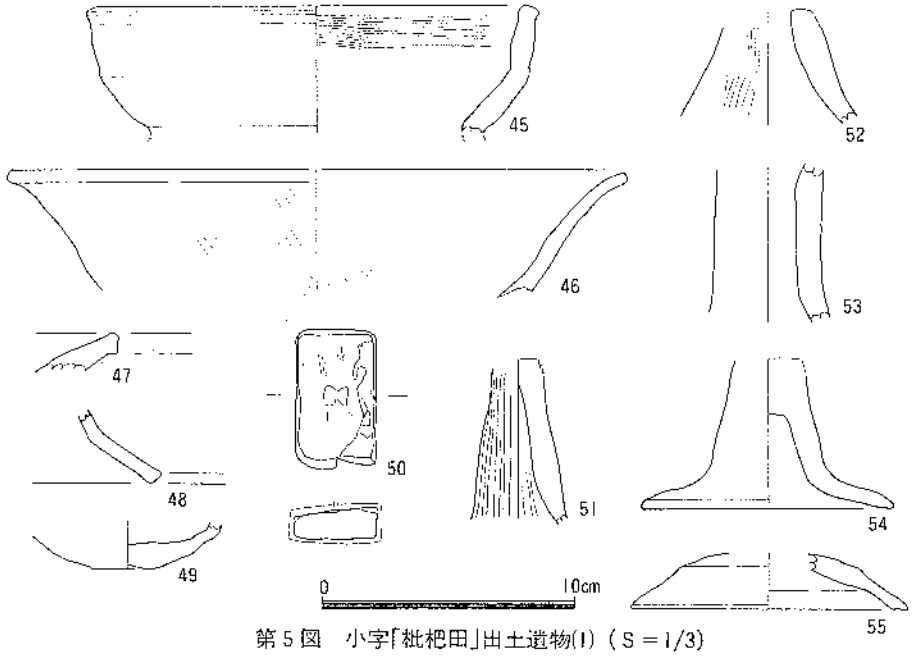
古式土師器(49)：鉢の底部で、小さな凹底を呈す。

砥石(50)：よく使いこまれた手持ち砥石であり、全面に顕著な使用痕が認められる。法量は長さ5.5cm、幅3.1cm、重さ45ｇをはかる。

須恵器坏類(56～58)：(57)は坏蓋で口径11.8cmを測る。丸みを帯びた天井部にはヘラケズリの痕跡は認めがたく、丁寧にナデ消されているものと推定される。(56)は同種蓋の擬宝珠形のツマミ、(58)はこれらに伴う有台の坏身で、高台径7.4cmを測る。高台の断面形状は横に長いつぶれた長方形状を呈し、畳付きの中央部が浅くくぼむ。焼成はいずれも堅緻だが、色調は(56)が灰色、(57)が橙色、(58)は表面が青灰色で断面がセピア色を呈す。無台の坏身片もみられるが、小破片のため図示し得なかった。

須恵器甕類（59～65）：いずれも甕類の体部片と推定される。外面の叩き締めは（59～62）が木目に斜行する平行線文、(65)は木目に直行する平行線文、(63)は同種叩きの木の目が浮き出て擬格子文化したもの、(64)は木目が辺平行の正格子文で、（62、65）については叩き締めの後、カキ目調整を施す。、(60)は摩滅のため、もともとの状態はわからない。内面の当具痕は（59～60、62～63）が同心円文と推定され、少なくとも（59、62～63）については中心凹タイプの原体を使用していることがわかる。(64)については明確でないが、(65)の当具痕は平行線文の可能性が高い[7]。(61)には当具痕は認められず、ナデ調整のみが観察される。焼成はいずれも堅緻であるが、色調については（59、62～63、65）が灰色～青灰色、(60)は橙色、（61、64）は表面の一部が灰色のほかは淡い褐色を呈している。

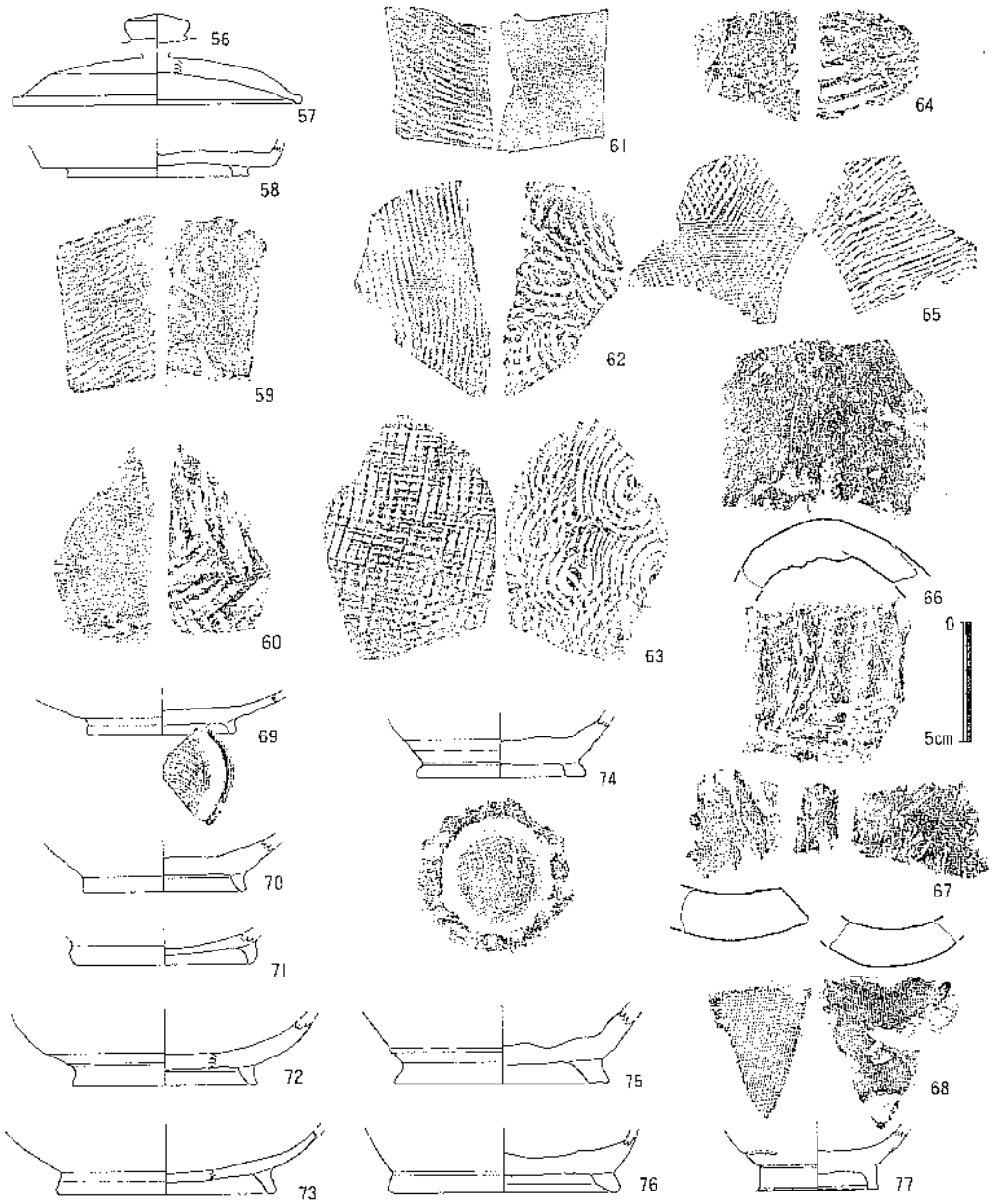
瓦類(66～68)：(66)は断面形状から丸瓦と推定されるが、他の２点は平瓦か丸瓦かわからない。いずれも凹面には細かい布目圧痕をそのまま残し、凸面はナデにより無文化されている。なお(66)の凹面には粘土板の合わせ目および植物繊維らしい紐の痕跡が認められ、少なくともその一部はほどけている。焼成はいずれも堅緻であるが、焼成は(66)が褐色を呈するほかは、灰色である。



第５図　小字「枇杷田」出土遺物(1)（Ｓ＝1/3）

灰釉陶器塊皿類（69～73）：いずれも貼り付けによる高台を有し、高台径は5.8cm～8.6cmを測る。高台の断面形状は(71)が端部を内彎させ、断面形状がいわゆる「三日月形高台」を呈するほかは、おおむね外にふんばるものであり、(72)のように明確に外に屈曲するものもある。(69)の底部外面には糸切り痕が、(72)の腰部外面には回転ヘラケズリが認められる。焼成は(70)がやや軟質なほかは、いずれも堅緻で、色調は灰色を呈す。

灰釉陶器壺類（74～76）：貼り付けによる高台を有し、径6.6cm～9.2cmを測る。高台の断面形状



第６図　小字「枇杷田」出土遺物(2)（Ｓ＝1/3）

は、おおむね台形～平行四辺形状を呈す。腰部の外面にはいずれも回転ヘラケズリが認められ、(74)の底部外面には糸切痕が観察される。焼成は堅緻で、色調は灰色を基調とするが、(76)が明るい灰色、他はややくすんだ灰色を呈す。

天目茶埦(77)：明褐色の釉をベースとし、それに黒色の釉が不規則な帯状を呈して流れている。外面の腰部以下は露胎で、胎土は黄色味をおびた灰色であることがわかる。高台は直立的にたちあがり、径は5.0cmを測る。（北村）

D「上鴨原」――東浅井郡虎姫町大寺――

古式土師器の壺、甕、高坏等が採集されている（第7図）。

古式土師器壺類(78～82)：二重口縁壺の口縁部で、屈曲部には竹管文を施す。内面調整は横方向のヘラミガキをおこなう。(82)は頸部で「く」の字状にくびれたあと、直線的に開く長い口縁部をもつもので頸部付近外面はハケ目調整、口縁部は内外面ともにナデ調整。

古式土師器甕類（79～81、83～91、94）：（79～81、84～88）は甕の口縁部片である。(79～80、84～85)は外反する口縁で、端部は(79、84)が丸く、(80、85)は面をもつ。(80)の内外面は板ナデ調整をおこない、(85)の外面頸部付近には叩き目の痕跡がのこる。(83)は口縁部で軽く屈曲し、端部で小さく外反する。端部外面は指により軽くつまみ出され、刻目状になる。外面調整は端部付近はナデ調整で、屈曲部より下はハケ目調整をおこなう。内面は横ハケ目調整。(86～87)は受け口状口縁である。(86)は口縁部屈曲部分に刻目を施し、(87)は外面をハケ目調整する。(88)は「く」の字に頸部でくびれ、長い口縁部がつく。口縁端部は内面に肥厚する。(89～91)は甕の体部片と考えられるもので、(89)は強く外反する頸部をもち、体部外面に2条以上の沈線を施す。(90)は体部に櫛描直線文と刺突文を施す。(94)は底径7.8cmをはかる台付甕の脚台で、甕底部は剝落している。脚部は内彎気味に開き、脚端部の接地面はひろい。内面は粗いハケ目調整をおこなう。

器形不明遺物(92)：外面に幅広い凹線で渦文を描く。

古式土師器鉢類(93)：小型の鉢の底部で、内弯気味に緩やかに立ち上がる。底面は軽い上げ底気味になる。内外面ともに丁寧なナデをおこなう。

古式土師器高坏類（95～100）：(95)は高坏の坏底部で、外面にはヘラミガキ痕がある。(95)は高坏の脚部で強くくびれる。(98～100)は高坏の裾部である。

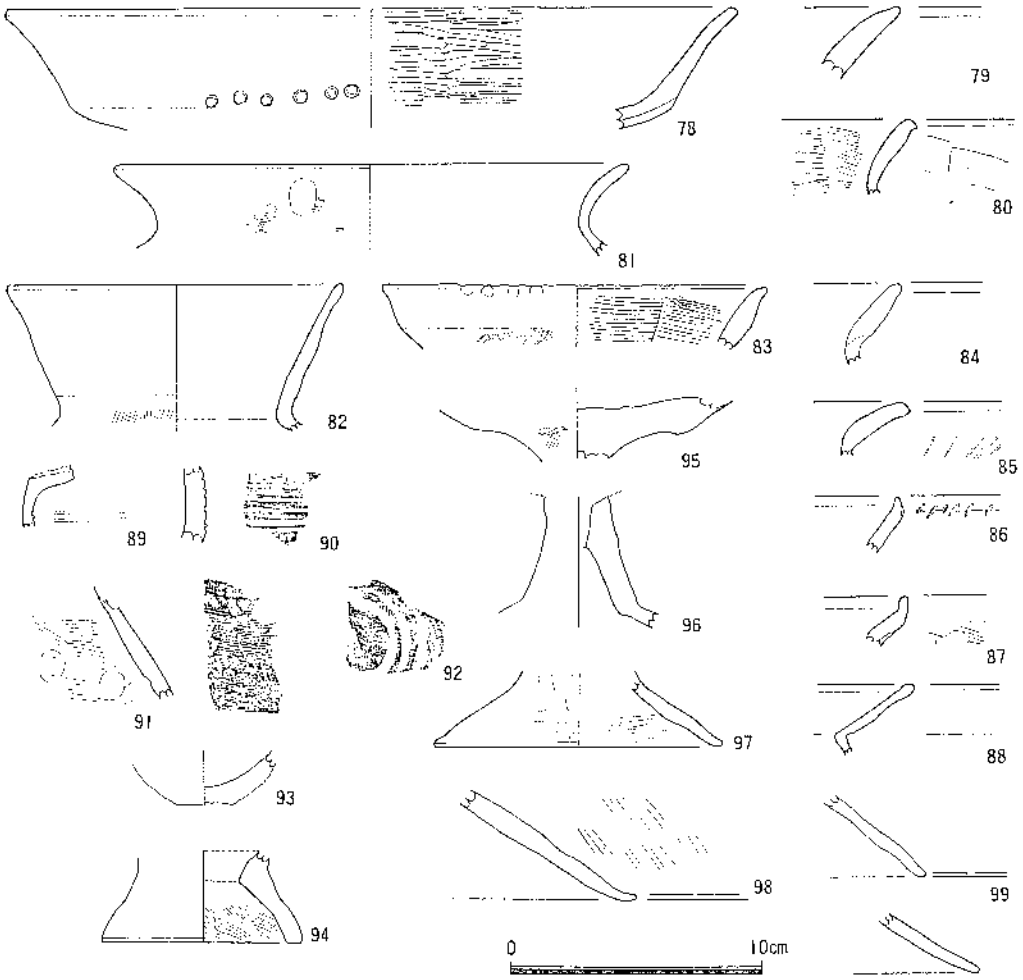
E「井ノ上」――東浅井郡虎姫町大寺――

古式土師器の甕、器台、高坏、および土師器の有台埦、管玉等が採集されている（第8図）。

古式土師器甕類（101～105、108）：(101)は頸部で軽くびれた後、軽い受口状を呈す口縁部をもつ。(102)は二段にくびれ、受口を呈す口縁部である。(103～105)は軽い受口を呈す。(104)は肩の張らない体部より、緩やかに外反する口縁部をもち、端部付近でわずかに内傾する。口縁部内外面ともにナデ調整をおこない、体部外面は軽い削り、内面は板ナデをおこなう。(108)は内弯気味に立ち上がる口縁部で、端部付近は小さく外方につまみ出される。口縁部外面はナデ調整、内面はハケ目調整をおこなう。体部外面はハケ目調整、内面はナデ調整である。

管玉(109)：翡翠製の管玉で、長さ1.8cmをはかる。

古式土師器器台(110)：器台の口縁部で、端部を下方に拡張し、端面に4条の擬凹線を施す。



第７図　小字「上鴨原」出土遺物（Ｓ＝1/3）

古式土師器高坏(111)：「ハ」の字に開く高坏の裾部で、脚柱部には内面に明確な稜線をもって接続する。

古式土師器鉢(112)：底径1.8cmで、中央部分がごくわずかにくぼむ。

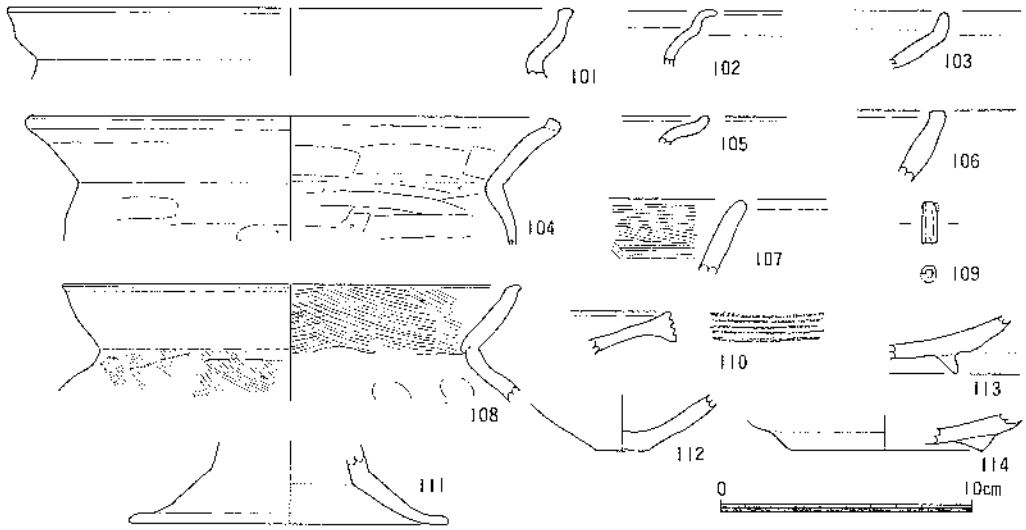
土師器埦（113～114）：高台付土師器埦である。

「上高木」――東浅井郡虎姫町五村――

弥生土器の壺、甕、器台、高坏などのほか、土製円盤、土玉が出土している（第９、10図）

弥生土器壺類(115～121)：(115)は肩の張る体部から頸部で強くくびれ、外反する口縁部をもつ。端部は面取りをおこなう。口縁部外面は縦ミガキをおこない、内面はナデ調整。体部外面は摩滅のため不明で、内面は軽く削る。(116)は外反する口縁部をもち、端部は面取りする。体部外面はヘラミガキ調整、内面はハケ目調整する。(117)は緩やかに外反する口縁部で、端部はやや尖る。外面は体部から口縁部にかけてハケ目調整、口縁部はその後、ヨコナデ。内面屈曲部はハケ目調整。(118)は口縁端面に擬凹線を施し、その上に棒状浮文を貼付ける。(120)は頸部に凸帯が付く。(121)はいわゆるパレス形土器の体部片で、外面には櫛描波状文と直線文を施し、丹塗りがおこなわれている。

弥生土器甕類（122～130）：（122～129）はいわゆる受口状口縁の甕で、(122～124)は口縁部に刺突列点文をもつ。(125、126)は無文で、(125)の外面受部下にはハケ目調整が見られる。(127～129)



第8図　小字「井ノ上」出土遺物（S＝1/3）

は受部屈曲部に刻目をもつ。(130)は口縁部が直立し、外面には櫛描の擬凹線をもつ。(131～133、136～138)は甕もしくは鉢の体部片。外面には櫛描直線文と刺追列点文をもつ。(131)は内外面ともにハケ目調整。(136、138）は刺突文、(137)は格子目文を施す。

弥生土器鉢(134～135)：受口状の鉢で体部は口縁部よりやや張り出す。ともに口縁部に刺突列点文、体部に櫛描直線文、刺突列点文をそれぞれ施す。調整は体部外面ハケ目で、その他はナデである。(135)の体部下半には波状文が見られる。

弥生土器器台(139)：大型器台の体部で、筒状の体部から、脚部付近で小さくくびれるものと考えられる。外面にはハケ目調整がわずかに見られる。内面の上半は板ナデ、下半はヘラ削りをおこない、裾部屈曲部ではハケ目調整をおこなう。

弥生土器底部（140～144）：（140～141）はいずれも小型鉢の底部で、(140)は小さな平底から内弯気味に立ち上がる体部をもつ。内外面ともにナデで、内面には蜘蛛の巣状の原体圧痕がのこる。(144)は底面中央が若干凹む底部から直線的に開く体部をもつもので、外面はミガキ、内面はハケ目調整をおこなう。壺の底部であろう。

弥生土器高坏類（145～149）：(145)は口縁部で屈曲して外反しながら開く浅い坏部である。内外面ともにミガキ調整をおこなう。（146～149）は脚部で、(146)は脚柱より円孔付近で緩やかにくびれる裾部が接続する。外面はハケ目調整の後、ヘラミガキをおこなう。内面裾部はハケ目調整。脚柱部は削る。(147)は端部に面をもち、内外面にヘラミガキをおこなう。(148)は端部を丸く収める。(147)は他に比べて立ち上がりがやや急である。

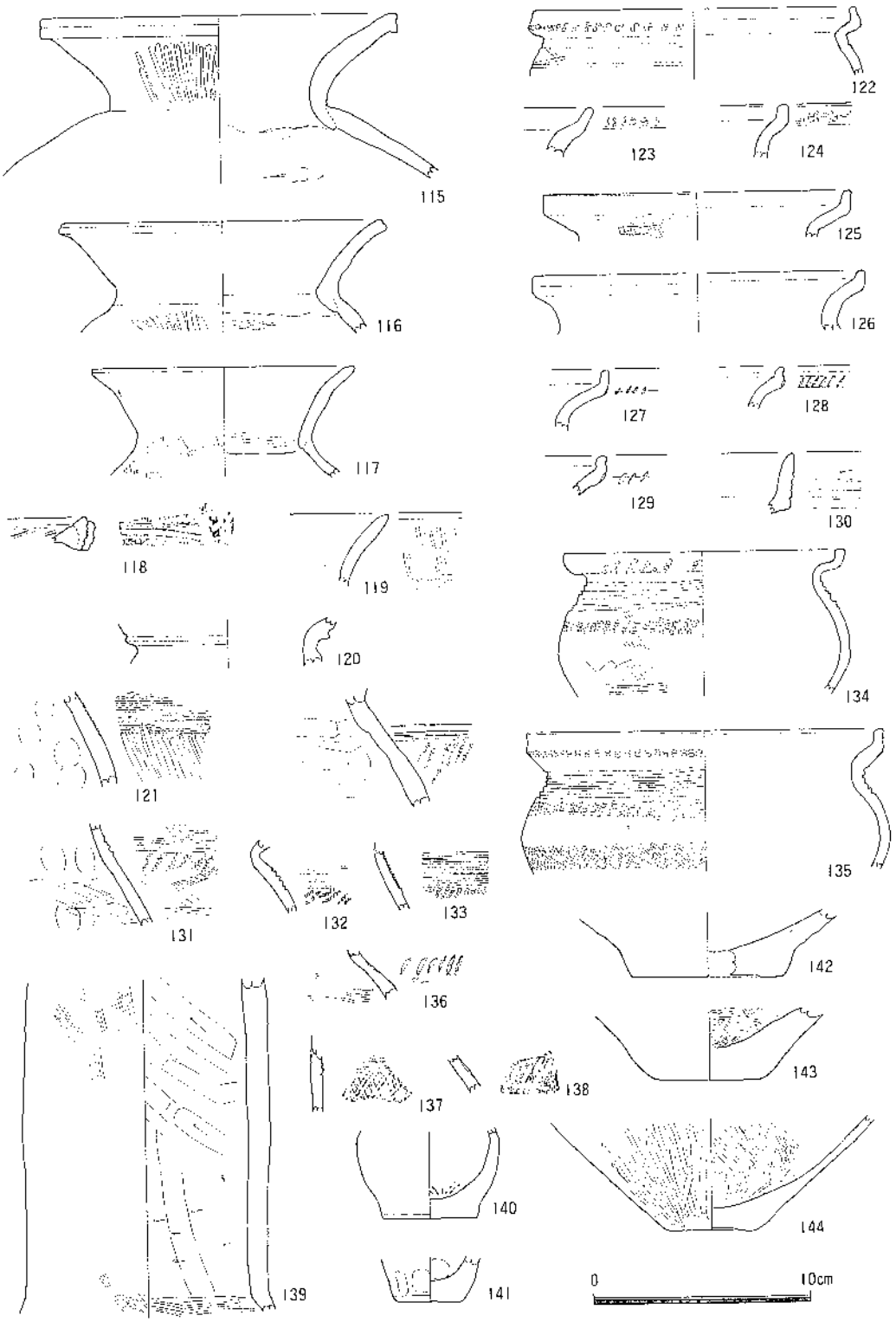
土製円盤(150)：直径4.4cmで6個の小孔を穿っている。重さは11gをはかる。

土玉(151)：直径は2cmで、中央に約2mmの小孔をもつ。重さは6gをはかる。

G「壱ノ坪」――東浅井郡虎姫町北大井――

弥生土器の高坏と穿孔のある二枚貝が出土している（第11図)。

弥生土器高坏(152)：緩やかにひらく器壁の厚い脚柱部をもつ。坏底部と脚部の接合は付加挿入法



第９図　小字「上高木」出土遺物(1)(Ｓ＝1/3)

と思われる。

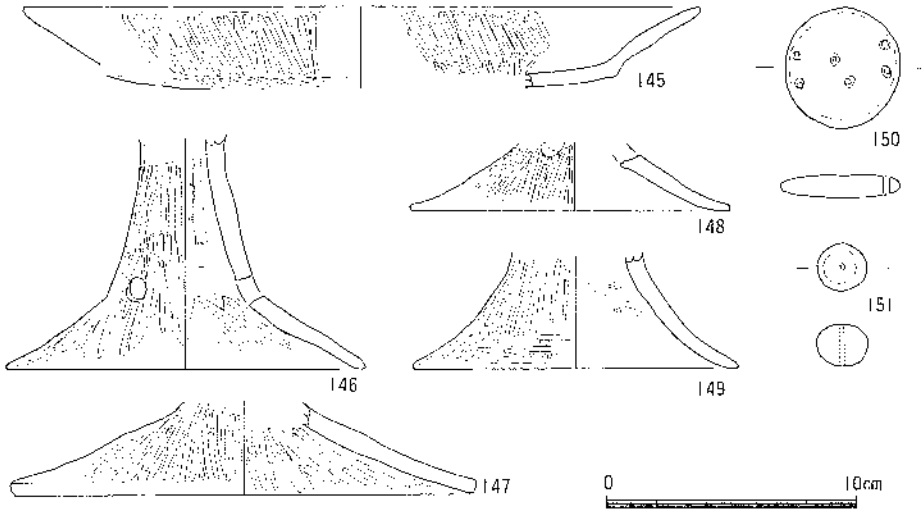
貝製品(153)：海洋性の二枚貝に直径約2㎜の孔を穿ったものである。

4．まとめ

弥生時代後期から古墳時代前期の様相——出土土器の時期について——

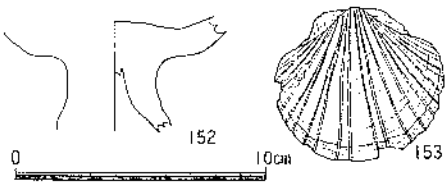
丸山古墳南側の小字「枇杷田」「上鴨原」「井ノ上」では平安時代を中心とする土器とともに、比較的多くの古式土師器が出土し、虎姫高校隣接地の「上高木」「壱ノ坪」では弥生土器、古式土師器が出土した。以下、これらの出土土器について既存の編年観[6]を参考に細別時期について若干考えていきたい。

まず前者の「枇杷田」等については、壺型土器は3点のみ出土で、(78)の二重口縁壺は竹管押圧文があるなど、無文化傾向の著しい布留式よりも庄内式並行期に位置づけられる。



第10図　小字「上高木」出土遺物(2)(S＝1/3)

(82)は布留式並行期の典型的な土器で直線的に大きく開く口縁部をもつ。甕型土器は小字「上鴨原」「井ノ上」においてのみ出土している。近江地域の特徴である受口状口縁を呈するものは6点出土しており、単純に口縁部が立ち上がり受口を呈するもの(86～87、101、103、105)と2段にくびれるもの(102)の大きく2タイプに分かれる。国友遺跡の編年図を参考にすれば、布留式並行期には両タイプのように



第11図　小字「壱ノ坪」出土遺物(S＝1/3)

明確な受口状口縁部を呈するものはない。また(86)のように口縁屈曲部に刻目文を施文するものは布留式中段階まで存続しておらず、庄内式までにしかない。したがてこれらは庄内式並行期段階のものと考えられる。口縁部が受口を呈さない土器のなかで、(108)のように口縁部が内彎気味に立ち上がり、口縁端部は水平に近い面をとり、断面三角状になるものは庄内式並行期からわずかに出現して、布留式並行期に一般化している。また(88)のように口縁部内面が肥厚する特徴を有するのも、布留式並行期の特徴を示している。器台、高坏型土器は全体の器形が明確にしがたいが、(110)のような、口縁部端面に擬凹線文を施すなど、弥生時代後期後半から庄内式並行期の特徴を示している。口縁屈曲部以下は欠損するが、(46)のように坏部が深く、緩やかに外反する布留式並行期の土器もある。

一方虎姫高校隣接地の「上高木」など出土の土器は、前述の「枇杷田」などの出土の土器群に先行する弥生時代後期後半から庄内式並行期の時期の土器であり、既往の五村遺跡の調査結果[9]から逸脱しない。壺型土器は頸部内面に明瞭な接合痕を残し、強く外反して開くもの(115、116)と、器壁がやや薄く緩やかに開くものとがある(117)。所謂パレス形土器がある（118、121）。甕型土器は受口状口縁を呈するものがほとんどで、口縁部に刻目文や刺突列点文などを施す一群(122～124、128、129)と無文のままのもの(125、126)がある。また口縁部に櫛状工具で擬凹線文を施す北陸の影響を受けた土器(130)などもある。鉢型土器は従来出土しているものと同じで受口状口縁のもののみである。(135)のように体部下半部に櫛描皮状文を施すものは従来は出土していなかった。高坏型土器は(32)のように口縁部で屈曲した後、外反して開くものを特徴として、脚部は緩やかに拡がる脚柱より「ハ」の字に大きく開く裾部がつく。口縁部の外反度が大きいなどの特徴から弥生時代後期終末に位置づけられる。

以上、位置的にまとまりのある小字、つまり丸山古墳南側の「枇杷田」等と、虎姫高校隣接地の「上高木」等の出土土器について個別に見てきた。そこで最後に、両者の関係についてまとめておく。後者は弥生時代後期後半に中心があり、これまでの調査結果からも五村遺跡では弥生時代中期から後期までの土器が出土しており、後期を中心とした集落であるといえる。一方、前者は古くても庄内式並行期までしか遡らず、中心は庄内式後半から布留式並行期にあり、前者に続く時期といえる。また管玉の出土をみるなど周辺に大きな集落の存在が予想される。土器様式の継続性から考えるなら、後者の集団が前者に移動したという考えも成り立つかもしれない。

（中村）

平安時代の様相――元三大師生誕地の伝承について――

当地は平安期の天台座主・慈恵大師良源、世にいう元三大師ゆかりの地として知られ、三川地先の天台宗玉泉寺は延喜12年（912年）に大師が生まれたところと伝えられる[10]。ここでは当地の大師生誕地伝承について、今回の調査結果から若干のコメントをおこない、まとめにかえたい。

まずこれまでに明かとなっている文献史料によると、『天台座主記』は良源を「浅井郡岳本郷人」、『釈家班記』は「浅井郡大井郷人」とする。両郷は『和名類聚抄』の浅井郡にみえる郷名で、疑問なしとはいえないが、ともに虎姫町周辺に郷域を比定するのが有力視されている[11]。今のところ良源の出身郷がいずれであったかは明らかでないが、『慈恵大僧正拾遺伝』の記述[12]からは、

表1　小字ごとの遺物出土量

小字名 ＼ 器種		弥生土器・古式土師器						須恵器		灰釉陶器		中世土器		計	その他
		甕類	壺類	鉢類	高坏	器台	不明	坏類	壺甕類	碗皿類	壺類	山茶碗	大皇茶碗		
A	丸山	-	-	-	-	-	-	6	7	1	2	-	-	16	
		-	-	-	-	-	-	100	145	15	30	-	-	290	
B	野瀬田	-	-	-	-	-	-	14	23	10	10	3	-	60	土錘
		-	-	-	-	-	-	265	1110	140	320	210	-	2045	有孔円盤
C	世枇田	2	1	-	10	-	5	5	10	8	4	-	1	46	瓦
		35	62	-	655	-	50	132	465	220	440	-	60	2119	砥石
D	上鴨原	64	4	1	17	-	100		-	-	-	-	-	186	
		745	185	25	470	-	755	-	-	-	-	-	-	2180	
E	井ノ上	33	5	1	3	1	5	-	-	-	-	-		48	酸化炎青白磁
		950	150	38	450	25	60	-	-	-	-	-	-	1673	管玉
F	上高木	20	8	2	9	1	5	-	-	-	-	-	-	45	土錘
		355	790	105	530	250	430	-	-	-	-	-	-	2460	上製円盤
G	壱ノ坪	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	貝（穿孔）
		-	-	-	150	-	-	-	-	-	-	-	-	150	

※上段は破片数で単位は片、下段は重量で単位はグラム。

良源が少なくとも「浅井東郡有河字田河」付近で幼少の日々をすごしたこともあったとうかがえるので、虎御前山南麓の田川流域の平野が良源の故郷であった可能性は高いと思われる。

しかしこれを実際に現地で裏付けしうるものとしては、これまでのところ玉泉寺本尊の慈恵大師座像が鎌倉期（13世紀後半）と推定されるもののの[13]、それ以前にさかのぼりうるものはなにもなかった。ところが今回あらたに三川地先の田川南岸一帯の「枇杷田」「野瀬田」「丸山」において平安期に属す多数の遺物の出土することが明かとなったのである。

そこで出土した遺物について、既存の編年観[14]を参考にその所属時期を検討しておきたい。まず須恵器坏類は割れにくい底部片が中心であるが「丸山」「野瀬田」「枇杷田」で少量出土している。あまり差は目立たないものの法量には大小の2種類がみられるようであり、扁平で横につぶれた長方形状の高台などの諸特徴から、おおむね平城Ⅶ期前後の時期に比定できるようである。灰釉陶磁については「丸山」「野瀬田」「枇杷田」で出土している。これも割れにくい底部の破片が中心であるため、いずれも施釉法等の詳細な観察はできない。高台の断面形状が三日月形を呈した、いわゆる「三日月高台」のものが多く見られるなどの特徴を考慮すれば、おおむね猿投黒笹90号窯期から折戸54窯期にかけての時期に比定できるだろう。ほかに「野瀬田」の山茶碗（23～25）や「枇杷田」の天目茶碗(77)など鎌倉時代以降に比定されるものや、「丸山」「野瀬田」の細同心円文の残る須恵器甕片（6、8、31、41）など、古式の様相を呈するものも若干存在するが、全体として眺めると、出土した遺物はおおむね高月町井口遺跡第12期頃から森氏編年のⅠ期を中心とする時期に比定できるようである。つまり遺跡は湖北地域において供膳具が須恵器から灰釉陶磁へ転換する時期を中心に展開しているようで、実年代を想定するとすれば、おおむね9世紀から10世紀代にかけての時期を求められるだろう。

以上より当地には大師存命中と同時代の集落遺跡が存在した可能性がきわめて高いことが指摘できる。しかも、その遺物中には一般の集落遺跡では基本的に見ることのできない瓦類が、少量ながら存在したことが注目される。つまりこのことは「寺」とは限らないまでも[15]か瓦葺建物が存在した可能性を示唆しているのであり、いまのところ時期的、内容的にみても、当地が元三大師誕生の地であったとしても特に不自然ではないように思われる。このことは、平安期仏教の湖

北地域への浸透状況を知る上で興味深い[16]。　（北村）

――謝辞にかえて――

百々正志さんとはじめてお会いしたのは8年ほどまえ、ここに紹介した遺物は氏によって20年以上もまえに採集されていたものである。氏にたいしては遺物の報告を快く承諾いただいたことに感謝の意を表すとともに、土木工事等による不時発見という限られた条件のもとにおいても、遺物の出土地を記録し、その資料的価値の保全に努力されたことに敬意を表したい。

なお本稿の執筆は以前、兼康保明さんにすすめられていたものであったが、今回中村健二くんの全面的な協力を得てようやくここに完成をみた。この遺物をはじめて拝見したのは、まだ大学に入ったばかりの頃で、当時はなにもわからないまま、ただ漫然と土器をながめていただけのように記憶している。

本稿がいささかなりとも地域史研究の発展に寄与できるものとなれば幸いである。　（北村）

注

(1) 滋賀県教育委員会　『昭和55年度滋賀県遺跡目録』（滋賀県教育委員会　1981年）
滋賀県教育委員会　『昭和60年度滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会　1986年）

(2) 谷口義介　「わが国で初出土の鏡－丸山古墳　東浅井郡虎姫町三川－」（『北近江の遺跡』サンブライト出版　1985年）

(3) 林純　「滋賀県虎姫町五村遺跡出土の巴形銅器に就いて」（『土盛』第11号　京都産業大学考古学研究会　1980年）
田中勝弘・林純　「7．東浅井郡虎姫町五村遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ－3』滋賀県教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会　1980年）
谷口義介　（「注目される巴形銅器」『北近江の遺跡』サンブライト出版　1985年）
用田政晴　「虎姫町五村遺跡出土のL字形筒状土製品」（『滋賀県文化財だよりNo.98』（財）滋賀県文化財保護協会　1985年）
田路正幸　「虎姫町五村遺跡の出土遺物について」（『滋賀県文化財だより』㈶滋賀県文化財保護協会　近刊予定）

(4) 足利健亮　「第7章　近江の土地計画」（『日本古代地理研究－畿内とその周辺における土地計画の復元と考察－』大明堂　1985年）

(5) 田中勝弘　「5．東浅井郡湖北町伊部遺跡」「6．東浅井郡湖北町留目遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ－3』滋賀県教育委員会、㈶滋賀県文化財保護協会　1980年）
田中勝弘　「6．国友遺跡と湖北地方の集落－集落論研究ノート」（『北陸自動車道関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ－長浜市国友遺跡－』滋賀県教育委員会、㈶滋賀県文化財保護協会　1988年）、および注(1)、(3)文献

(6) 当具原体の凹凸は、器面にのこる当具痕の凹凸とは逆になる。同心円文の当具痕は中心凸タイプの痕跡が一般的で、凹タイプのものはすくない。

(7) 内面の平行線文当具痕は管見に触れただけでも、長浜市堀部西遺跡、同高橋南遺跡、同大東遺跡、守山市横江遺跡で認められる。今後報告例は増加するだろう。

(8) 田中勝弘 「5．出土遺物」(『北陸自動車道関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ－長浜市国友遺跡－』滋賀県教育委員会、㈶滋賀県文化財保護協会 1988年)

(9) 注(3)文献

(10) 地元に伝わる大師伝承とはおおむね以下のようなもので、出自については貴種流離譚の一種とみられる。元三大師は宇多天皇の御子で母は物部氏の月子。月子は天皇の寵愛を得たが、他の女官の妬みを受けたため、三川の里に逃れ、そこで大師を出産したという。現在の虎姫町三川地先がその大師生誕の地で、そこに建立されたという玉泉寺の境内には大師誕生の際の「産湯の池」が伝わる。同寺本尊の重要文化財・慈恵大師座像は病床の母をひとり残して叡山に帰らなねばならなかった大師が、身代わりに自ら彫刻したものといい、大師が像に母を頼んで三川を去ろうとしたときには、その像が動き出し村はずれの小橋まで見送りに来たという。これを「暇乞いの橋」といい、今もそれと伝わる橋がある。月子の墓と伝わるものも存在する（富永隆三「元三大師の産湯池」(『近江むかし話』洛樹出版社 1968年)など)。

(11) 大井郷の比定地については異論ないが、岡（岳）本郷の比定地には問題が多い。諸説を要約してみると、いずれも積極的な理由があるわけでなく、玉泉寺の元三大師生誕地伝承にひかれ、虎御前山を「岳」とみたてて郷域を比定しているにすぎない（吉田東伍『増補 大日本地名辞書 第2巻 上方』(富山房 1969年)、竹内理三編『角川日本地名大辞典 25 滋賀県』(角川書店 1979年)など)。なお比定の有力な根拠になっている『天台座主記』の「良源岳本郷人説」については、『釈家班記』の「良源大井郷人説」との関係が充分検討されていない。検討する材料自体も不足しているが、玉泉寺所在地の三川付近が大井郷と岳本郷との境界付近にあたるため混乱が生じたとして整合性をはかろうとする見解が代表的なものだろう（平林盛得『良源－人物叢書シリーズ』(吉川弘文館 1976年))。しかし郷域比定の根拠の脆弱さは指摘できても、完全に否定し切ることはできないし、またこれにかわる有力な比定地があるわけでもない。同様のことは『延喜式神明帳』の浅井郡にみえる岡本神社の比定社についても言え、今のところ、湖北町丁野の岡本神社、同町留目の鹿嶋神社、びわ町早崎の五社神社、浅井町北ノ郷の岡高神社が候補社として上げられるが、いずれも比定するに足る有力な根拠がない(江龍喜之「60 岡本神社」『式内社研究調査報告 第12巻 東山道1』(皇學館大学出版部 1981年))。蛇足ながら鹿島神社は田川流域の虎御前山の北東部にあり、これが式内・岡本神社とすれば従前の説にとって有効となる。

(12) 平林盛得『良源－人物叢書シリーズ』(吉川弘文館 1976年)ほか

(13) 大津市求法寺の文永4年銘の大師像、伊香郡高月町高野神社の弘安6年銘の大師像などとの比較研究から、玉泉寺の大師像は13世紀後半代の作と推定される（宇野茂樹『近江路の彫像』(雄山閣 1974年))。像が13世紀代のものとしても、後世に他所より搬入されてきたものではないという保証はない。

(14) 田中勝弘『国道365線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－伊香郡高月町井口・

柏原遺跡－』（滋賀県教育委員会、㈶滋賀県文化財保護協会　1984年）

森隆「近江地域出土の古代末期の土器群について」（『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中近世土器研究会　1988年）

(15) 上原真人「8　仏教」（『岩波講座　日本考古学　4　集落と祭祀』岩波書店　1986年）

(16) 湖北地域では白鳳期に最初の寺院の造営を認めうるが、平安期まで存続するものはきわめて稀である。しかしながら、奈良末・平安初期とされる木之本町鵜足寺の薬師如来立像を最古とする多数の仏像の存在が知られるほか、同時期の説話集中にも、法相宗の『瑜伽師地論』100巻の書経を発願した近江国坂田郡遠江里人（『日本霊異記』）、筑摩江の蓮花を採り阿弥陀仏を供養して往生を遂げた近江国坂田郡の息長氏の女人（『日本往生極楽記』）などが知られ、湖北地域での仏教信仰の深まりを推測できる。こうした平安期における仏教信仰の一般化が天台座主をも輩出する土壌となったのだろう。

編集後記

本年度は協会設立20周年。これに伴う展示会や記念誌の発行等色々な事業を実施した。本号も20周年を祝う意味で、職員全員の投稿を呼びかけたところ、ほぼ全員の27名の参加を得、発刊することができた。紀要の充実はみんなの頑張りによるところが大で、次号以降も編集者を悩ませるほどの投稿を期待したい。

平成２年12月

紀　要　第４号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印　　刷　宮川印刷株式会社
大津市富士見台３番18号
Tel(0775)33-1241